様式第３号

令和６年度　学校経営報告書（自己評価）

学校番号	24	学 校 名	伊豆の国特別支援学校　伊豆下田分校	校 長	松本仁美

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果○と課題●
安全・安心	**生命の尊さや人とのつながりを大切にし、一人一人の良さを受け入れ、互いを思いやる心の醸成**	・各学部の経営計画に基づき、児童生徒の命が守られていると答える教職員や保護者（AB100%）	・マニュアルの見直しや防災備品の整備を実施した。 ・ヒヤリハットの情報共有体制をより迅速に共有できるように整備した。（AB100%）	A	○防災体制を、訓練ごとに見直し、下田小学校とも検討することができた。 ●引き続き、防災以外にも、ヒヤリハットや緊急時対応等、その都度、見直しをして意識できるようにする。
		・信頼できる教職員に向けて、自身の行動を振り返ることができた教職員（AB80%）	・人権チェック等で自己を振り返ることができた。（AB100%）	B	○児童生徒や教職員に対して人権に配慮した行動がとれている。 ●自己評価だけでなく、引き続き教員間で指摘や助言し合える雰囲気を作るようにする。
	命のつながりを実感する食育の推進	・給食センターと連携し、安全な給食提供ができたと答える教職員及び保護者（AB90%）	・センターと連携し、安全な給食を提供することができた。（AB100%）	A	○気になったことは、すぐ声を上げ、給食センターに連絡し確認することが定着している。
		・食と各教科等の関連を意識した指導をした教職員（AB90%）	給食や調理、栽培活動や買い物学習等を通して食育を指導した。（AB93%）	B	○センター栄養士による食育教室を2回実施し、児童生徒の食べ物や健康への関心や理解が深まった。 ●来年度は、給食センターの給食だより等を活用して、より体験的な食育指導を充実させる。
	児童生徒の命を守る安全教育の充実	・緊急時の対応や防犯防災訓練をとおして、児童生徒の安全を守る行動を身につけた教職員(AB100%)	・実践的な訓練や専門家の講義や助言を受けて、児童生徒の安全を守る行動を身につけることができた。（AB100%）	A	○防犯訓練の課題から、事務と連携して鍵の設置など校内環境を改善した。 ●児童生徒の緊急時対応は、今後も訓練を繰り返して全教員が迅速に役割を分担し、的確に動けるようにする。
専門性	主体的・協働的・深い学びによって、資質・能力を育成する授業実践	・児童生徒の学びを見取り、適切な目標設定と評価ができた教員（AB100%）	・ラーニングマップを活用しての実態把握と目標設定、特性に注目した一人一授業を実施することができた。（AB100%）	B	○特性や学び方に着目することで、児童生徒の理解が深まった。 ●適切な目標設定や授業改善の力は、教職員で個人差がある。目標設定やグループ研修で授業について深い検討ができるように、効果的な研修の持ち方等を見直す。
		・ラーニングマップの活用による授業づくりを行い、実践後に授業改善を進めた教員（AB100%）			
	特別支援教育の専門性の向上	・障害の特性に応じた支援や学習指導要領に基づく研修ができた教員（AB100%）	・障害特性や摂食、身体機能、ＩＣＴにおいて、専門家を招いて研修を行った。（AB100%）	A	○専門家の助言や研修内容を共有して、実際の生活や指導に生かすことができた。 ●来年度も、指導ニーズにあった講師招聘や専門分野の研修を精選して実施する。
		・PC やタブレットの活用により、授業準備の効率化や学習の定着に効果を得た教員（AB90%）	・PC やタブレット活用は増加し、授業準備や授業で効率的に活用している。（AB100%）	A	○タブレットを使い、生徒が主体的に取り組む授業実践を参観し合い、刺激になった。 ●効率的な活用方法や実践を共有し、さらに他校の活用情報も紹介し取り入れる。

様式第３号

連携	キャリア教育の視点で小中学部、高等部のつながりと、児童生徒の願いや夢を大切にした進路指導の充実	・小中の系統性や将来を意識して指導できた教員（AB90%）	・生活年齢や高等部卒業後を想定する必要性を、意識することができた。（AB100%）	B	●生活年齢や高等部卒業後を意識し、そのために、今と数年後に必要な課題を、保護者とともに段階的に考えて指導する。
		・児童生徒に応じた適切な情報提供や、進路指導ができたと答える教員及び保護者（AB90%）	・中学部では進路学習の中で、高等部見学を実施した。 ・保護者に卒業生の話を聞く進路学習会や伊豆松崎分校の進路見学を実施した。（AB100%）	A	○生徒や保護者が、進路先の一つである高等部を実際に見ることは、児童生徒の夢や願いを考える上で有効だった。 ●児童生徒・教職員・保護者の進路学習の系統的な計画を整理する必要がある。 ●保護者へのニーズに合った情報提供と、研修会や進路見学への参加意識を高めることが必要である。
	保護者や地域住民との協働を推進し、地域と共に歩む学校づくり	・各学部において、適切な交流を計画し、地域に貢献できたと感じる教職員（AB100%）	・下田小学校、交流籍を活用した居住地校交流、地域の高校との交流を積極的に進めることができた。 ・ディサービスや市の芸術祭等の地域資源を新規に活用した。 ・中学部は作業製品を媒介に、地域の観光施設や福祉施設と積極的に交流することができた。（AB100%）	A	○分校児童生徒が交流を楽しみにし、交流先の児童生徒の共生へ意識の成長も感じられた。 ●限られた時間や制約の中で、より充実した交流ができるように、内容や打合せ等の工夫が必要である。 ○地域での交流では、生徒が意欲的に活動する姿が見られた。 ●地域を活用した学習において「地域に何が貢献できたか」を検証し、価値づけることが必要である。
		・地域を活用した学習活動をとおして、児童生徒が意欲的に学んだと感じる教職員及び保護者（AB100%）			
チーム学校	特別支援学校のセンター的機能の充実及び関係機関との連携の強化	・センター的機能による成果の整理及び検証（毎学期）	・賀茂地区の幼保園小中高からの支援依頼に対応した。 ・見学や支援、会議、講義等、ニーズに合った支援ができた。（AB100%）	A	○６人の教員が校外の支援にかかわった。支援を担う教員を増やすことができた。 ●引き続き依頼への支援に終わらず、地域の特別支援教育の課題改善につながる支援内容や工夫を検討する。
		・学校内外の情報共有と、支援会議やケース会議等での案件の整理及び成果の検証（毎学期）	・地域の関係機関や支援者と連携して、校内のケースに対応した。（AB100%）	A	○校内のケースでは、教員や保護者に、家庭や学校内だけでなく関係機関と連携して課題解決していくという共通認識ができた。
	教職員一人一人が責任をもった業務遂行と、やりがいを感じる働き方の推進	・キャリアステージと自己目標シートに基づき、自身の役割を理解して経営に携わった教職員（AB100%）	・少数の分校なので、一人が複数の役割を持って業務に当たり、経営に参画した。（AB100%）	B	○面談等で自身のキャリアステージや役割を考える意識が高まった。 ●組織の中で、人材育成の視点を持って経営に参画する意識の向上が必要である。
		・計画的な業務遂行のために努力し、働き方を改善できた教職員（AB90%）	・働き方や効率を見直し、長時間勤務の教員はいなかった。（AB93%）	B	○ペーパーレスや、ＰＣ会議など、効率化できるものをすすめ、定着しつつある。 ●教職員個々のタイムマネージメントや、校内業務を俯瞰し、効率化を考える視点を持つことが必要である。